

異界の魔術士

無敵の留学生 2

大学院の仲間達

オディマン・キエストロー
かつて大国ティルファで
権勢を誇った四老公の一人。
いつか復活することを予言し、
消え去ったというが……

バスラ
朔耶が壊滅させた
魔族組織の残党。

ブラハミルト
『知の都』ティルファの
最高指導者。
魔術士でもある。

重雄
朔耶の兄。元格闘オタの
現萌えオタ。異世界の
美女とキャッキャウフフ
するのが夢。

バルティア
グラントゥルモス帝国皇帝。
朔耶をこよなく愛する。

ルーネルシア
おっとり系お嬢様。
家系に何か秘密が
あるらしく……？

ドーソン
平民出身の男子学生。
エルディネアの従者。

エルディネア
公爵家の令嬢。
ドーソンが好き。

つづさくや
都築朔耶
異世界召喚され、
最強の魔術士となった少女。
別名『戦女神』『異界の魔術士』etc.
現在はフレグンス王国の
王都大学院に在学。



目次

異界の魔術士 無敵の留学生 2	7
番外編 ブラハミルトの日常 修学旅行裏話	197
番外編 異界の道化士 ^{どうけし}	211

異界の魔術士

無敵の留学生 2

序章

時は八十三年前。

オールドリア大陸は『知の都』と呼ばれるティルファの国。その中央に抱かれし満々たる湖。そして、湖の中島にそびえるは、この国の中枢である魔術研究塔。

その最上階の一室にて、独りの老者が研究用の机上に開かれた古い書物を見つめていた。

老者の名は『オディマン・キエストロー』。彼はそれより百年ほど昔に、街に住んでいた魔族の一家を襲撃し、秘術である『体内呪文』を手に入れた魔術士グループの一員だった。

『体内呪文』——それは常に肉体を再生し最善の状態を維持する不老の秘術。

彼を含めた魔術士達はその秘術で長い寿命を得て、数十年の間ティルファを支配する『四老公』となる。

が、強引な手段で奪って模倣したに過ぎぬ体内呪文は、不良品でしかなかった。本来であれば永続的に若さを約束するはずのそれは、不老の効果も低く、定期的に体内の魔力の流れを整えなければならぬ。

彼等は懸賞金を設け、捜索組織を立ち上げ、各地で魔族狩りを行ってその魔族等から様々な秘術を奪い、ほどなく魔力を整える効果的な手段も手に入れた。

しかしある時、捕らえておいた魔族達が反乱を起こして逃亡し、四老公達は体内呪文の維持と安定のための手段を失ってしまう。

不完全な体内呪文で肉体の維持も限界に達していた彼等は、一人、また一人と朽ち滅んでいく。四老公の中で一番魔力が高かったオディマンだけが、朽ち逝く身体を引きずりながら、かろうじて生き残り、不老の術を研究する魔族を探し求めている。

そんなある日、彼のもとに、古い魔術研究の書物が届けられる。

四老公が最重要事項としていた『生命操作系の研究を高く買う』という施策。その報酬を目当てに売り込みに来た者がいたのだ。

南東の未開地にある集落で、ポル族という原住民から手に入れたという、古代の魔術士が残した書物。その書物には、精霊石の欠片に宿った精霊の力によって紙の劣化を防止するという高度な処理が施されていた。

本の表紙には『魂の進化・前編』と記されており、書かれたのはおよそ八百年以上も昔らしい。

内容は、肉体的な生命を脱却し、魂の進化による精神の永続法を確立させる事で、永遠の命を得るといふもの。

「おお……これは……これならば……」

四老公の最後の生き残りとなった彼は、己が命を永らえて現世に留まらんがため、この方法に懸ける事にした。

それから十数日後の深夜。

ティルファの森に付む大きな屋敷の中で、家中の者達が慌ただしくこの一人娘の旅の準備を始めていた。

「この親書を決して失くさないように。向こうに着いたらすぐにこれを提示するんだ」

「ブラフニール家なら、きつと困ってくれるはずよ」

まだ年端もいかない少女に隣国の公爵家に宛てた親書を持たせ、信頼できる護衛や執事、侍女達を付けて、隣国フレグンスへと亡命させる。

彼等は四老公オディマンの血筋を受けしキエストロー家として、ティルファの支配者階級の中でも特別な存在であった。

権力を握った四老公がまだ若々しい肉体を維持していた頃には、酒池肉林の宴が連日連夜開催されていた。

その間、由緒ある家柄の貴族令嬢と親密な関係になったり、素性の知れない行きずり女に子を孕ませた事も数知れず。そんな中でも、特別に扱われた女性達はいた。

彼女達との間に産まれた子供は、四老公の血筋を継ぐ者として正式にティルファの支配者層に組

み込まれた。このキエストロー家もそうした家の一つである。

先日、彼等の一人娘が研究塔に呼ばれ、オディマンから直々に「特別な儀式」を受けた。

魔術の才能を持つ娘は儀式後、その身体に不思議な紋様が浮かぶようになった。

当初娘の両親は、古い先短いオディマンが四老公の秘術を娘に託したモノと考えていたのだが、それは違っていた。

老化に耐え切れず権力の表舞台から引退し、すっかり求心力も低下した四老公の支配体制。だが、今や『四老公』と呼べるのはオディマンのみ。そのオディマンが未だ権力の座にしがみつくと体制から、脱却を図ろうとする新勢力。そこに属する研究員より、「特別な儀式」の内容が娘の両親に語られる。

それは、精霊との契約を利用した特殊な呪術的儀式で、対象者の身体に血縁である他者の精神を入り込ませるための道を作る、というものだった。娘の身体に浮かぶ紋様は、その「証」である。

精霊と『血の盟約』を行うと、その契約内容は血縁者に代々受け継がれ、血筋が途絶えるまで続く事になる。この性質を生かし、かの老者は精霊と『血縁者との肉体の共有』を補助する『という契約を行ったのだ。これにより娘の血筋を受け継ぐ者は皆、オディマンとの肉体の共有を強いられる事になる。あとはオディマンが朽ち逝く身体を捨て、精神をその肉体に乗り換えれば良い。

オディマンは、以前より自身の精神を受け入れる器として、血縁者の肉体を求めていた。それに最も適合したのが、キエストローの娘だったのだろう——と研究員は語る。

娘がオディマンの生贄いけにえにされようとしていると悟った両親は、彼女を逃がそうと決意した。

「いかにオディマン様といえど、フレグンス王国に亡命させれば手出しは出来まい」

彼等は精霊術に関する研究資料など、ティルファの持つ情報資産の中でも、特にフレグンス王族の関心を引けそうな手土産てみやげを持たせて、『贄いけにえの印』を持つ娘を隣国へと送り出した。

そうして生贄いけにえを失ったオディマンに、新勢力の指導者達は今がチャンスとばかりに研究塔の全権譲渡を迫った。

オディマンの私室にて、隠居後の生活は保障すると言って誓約書を差し出す新勢力の指導者達。

「さあ、この書類にサインを」

「これは法的に極めて正当な契約で——」

「……くだらぬ」

「は？」

オディマンは激怒しながら言い放つ。

「誓約書？ 全権の譲渡だと!? そんな紙切れが何の役に立つ！ 権力に保証などあるものか！

組織を動かしたくば、貴様らで勝手に指示を出して好きにやればよいのだ！」

それで上手くいけば下の者は勝手に付いてくる——最高権力者のあまりに奇抜な価値観に、新勢力の指導者達は言葉を失う。

「貴様らは……そんな事のために……儂わしの大事な依り代しよを——」

次の瞬間、怪しい響きの詠唱が紡がれたかと思うと、オディマンの私室から黄土色の泥が溢れ出した。泥の表面には人の顔や腕、足などが突き出ている。

それは、オディマンが放った古いにしえの禁呪、『融解魔術』によって溶け出した新勢力の指導者達の成れの果てであった。

後にオディマンは、四老公派や新勢力派を問わず、研究塔の実力者を地下の一室に集めると、いつの日か復活する事を予言し、自らの精神を碑石ひせきに封じて消え去ったという。

やがて、その逸話は、ティルファの古い伝承の中で忘れられていった。

第一章 修学旅行計画

巨大な波紋のごとき五重の城壁で仕切られた王都フレグンス。一般開放区にそびえる王都大学院。

その一階のいつものサロンで、いつものメンバーと談笑する黒髪の少女。

およそ一年前に入学し、この大学院に大きな変革をもたらした異界の魔術士——『戦女神サクヤ』こと都築朔耶である。

彼女は昨年友人達と共に、保守的な指導の多かった大学院において、学生キャンプという生徒主体の課外授業を定着させたのだが、今また、次の学院イベントについて話し合っていた。

「修学旅行の行き先はティルフアでほぼ決定みたい」

朔耶がそう告げると、同じテーブルで向かい合う友人達が頷く。彼等は大学院の武術の授業で行われる模擬戦のメンバーで、リーダーはブラフニール公爵令嬢エルディネイアだ。

「サムズはまだ工事してる場所が多いみたいだしね」

「……まあ、妥当な選択だろう」

「カースティアや帝国も候補に挙がってたけど……」

「いきなり遠方の帝国というのも難度が高いよね」

修学旅行の企画自体は、学生キャンプの実績があつたせいとか、割とすんなり決まったので、今回は署名集めやらアンケートやらで朔耶達が走り回る事もなかった。

しかし、支援型魔術士のノーマや攻撃型魔術士のリコー、剣士のエルスレイが持ち寄った噂によると、行き先については大学院の上層部でも結構揉めたりらしい。

やはり学生キャンプの時と同様、利権絡みで色々あったようだ。

『安全面を考慮すれば、カースティアが最も適しているのではないか？』

『うむ、まずは衛星国を含め、自国領内に限定するのが確実だろう』

『バリリツカムはどうでしょう？』

『しかし、国内旅行では修学の意義が満たされない！』

学院長や講師達が集まって行われた学院会議においては、最初フレグンスの衛星国家であるクリューゲルの首都、カースティアが有力だった。かの街の中心部には立派な大図書館がある。近年では、『異界の魔術士』朔耶が着手した釣り船観光事業で大分賑わいが増したらしい。

が、自国領内では、フレグンス最高の教育機関である王都大学院の修学先として不十分との意見も根強く、別の衛星国家サムズの首都エバンスは、それ以前に元貧民街の再開発や水道工事の最中で落ち着かないという事で却下。

『武』の国と呼ばれるグラントウルモス帝国はあまりに遠方。

クリューゲルの国境にある温泉の街、バーリツカムを推す者もいたが、あそこは春売り——いわゆる娼婦の名所でもあり、学問とはあまりにかけ離れているという事で即座に却下されていた。

最終的に、今回は四大国の一つ、ティルファが妥当たとうという流れになったらしい。ティルファは国外であるが、距離的にはカースティアに行くのと大差ない。

何よりティルファは大陸中の魔術士や学者、発明家などが集結し、日々開発研究に励む『知の都』である。学生が訪れるのにこれほど適した国も無い。

『我がフレグンスとティルファとの交流の歴史から見ても、学院生の修学の場としては最良と考える』

『あの、バーリツカムもいいと思いますよ』

どの候補地にも強固な支持者はいたが、一番多いのはティルファだった。大学院に勤める講師達に、ティルファから来ている者が多かった事もティルファ推しが強かった一因だろうと言われている。

しかしその裏には、ティルファ政府からの、自国を旅行先に推すようにとの報酬付き要請があったとかなかったとか。

今回の旅行は地球世界の修学旅行とは違い、二年以上在籍している全ての生徒に対し、一年に一度、学院主催で安全かつ安く旅行に行ける権利が与えられる、という形式になる。

ちなみに、発案者である朔耶は入学してまだ一年と少しであるが、特例で参加できる事になっていた。

なお旅行先は、学院が定めた一ヶ所のみ。グループに分かれ、複数の場所へ同時に訪問、という案もあったが、護衛の手配や受け入れ側との調整も考え、このような形になった。

定期的にフレグンスの大学院生達が旅行にやってくる——

それは、旅行先の街にとっても実に美味しいイベントであった。

フレグンスの由緒正しき大学院に通える人物ともなれば、貴族はもちろん、平民であってもお金持ちや大商人の家の者が多い。その上、本人も将来的に有望。いずれにしても交流を深めておいて損は無い相手である。

一方で、大学院側にも相応のメリットがあった。

旅行先の国の街から、新たに入学希望者の増加が見込める。

当然それらの生徒達も、大半が貴族や大商人の縁者。彼等を通じて、大国の有力者達とコネを作ろうとする者達からの寄付も期待できるといったところだ。

修学旅行の企画が『割とすんなり決まった』真相は、こういったわけであった。大学院側は、既にこの修学旅行を恒例行事化する事を視野に入れているらしい。

なお交通手段であるが、今回は馬車で行く事が決まっている。将来的には、片道三日以上かかる場所には竜籠りゅうかごを使う事も検討しているようだ。

旅行に参加する生徒達は、いずれ竜籠りゅうかごに乗る機会がある事にも期待していた。

こうして修学旅行の詳細が決まってく中、実のところ訪問した先で何を行うのか、という具体的な活動内容はまだ詰められていない。そこらは朔耶達学院生が自主的に話し合っただけで決める事になった。

生徒達にいきなり自由行動をさせても何をすればいいのかわからないであろう、という事を前提に、朔耶はまずマニュアル作りを提案した。

「短い旅行期間を有意義に過ごせるように、旅のしおりを作っておこうと思うのよ」

そう言って朔耶は、学生キャンプのアンケート用紙作成の時のように、考えていた内容をエルデアイネシアに書き留めてもらう。

朔耶もこちらの文字を少しは書けるようになっていたが、まだまだ片言なので、書類作りには人の手を借りる必要があった。

それはさておき、まずしおりに盛り込むべきは旅行の日程である。

今回の旅行のメインの催しもよおは、ティルファ中央研究塔の見学。

これについては、学院側、ティルファ側の双方で企画し合ったものらしい。研究塔には魔術に関する歴史的な資料や、貴重な魔術の研究道具などが展示されている。

そこで朔耶達は、それ以外にティルファの街で出来る、修学旅行として楽しめそうなイベントを

考える。

魔術式製品製作の体験学習や、発明品申請の手続き説明など、実際に参加する生徒達からの要望を纏めて学院側に提出し、そのリストを元にティルファとの協議を経て、受け入れ可能な内容を選選ぶぶ。

しおりのスケジュール表には、自由時間の部分に空欄を設け、後で決まったイベントを記入できるようにレイアウトしておく。

続いて出発前の準備や、道中の注意事項なども盛り込み、今回以降の修学旅行にも流用できるように、心得についても記しておこうという事になった。

「騎士の訓戒くんかいのようなものですわね」

「まあ、そんな堅いもんじゃなく、旅行ガイドみたいなもんよ」

エルデアイネシアの見解に突っ込んだ朔耶は、その具体的な内容を説明する。

ティルファの街や研究塔の簡単な見取り図を入れて、迷子になった時や困った時の駆け込み場所などを記しておくのだ。

「なるほど、そうすれば旅に慣れてない人も安心だね」

それは便利に使えるそうだと納得するメンバー達。

こうしてしおり作りは着々と進んでいく。

なお、今回の冊子作りにも、学生キャンプのアンケート用紙の時のように、朔耶の父の工場にあ

る広告用の印刷機が大活躍の予定であった。

「楽しみだねー」

しばらくサロンでしおり作りのためのネタや今後の予定などを話し合った朔耶達は、そろそろ行こうかと皆で席を立った。

今日は模擬戦があるので、これから更衣室へ着替えに向かうのだ。ポテンシャルが規格外の朔耶も、いつも通り癒し要員として参加する。

以前は制服姿のまま活動していたが、今はちゃんとそれ用の衣装を着るようになった。なので、最近ではエルディネイアのチームメンバーとよく一緒に着替えている。

更衣室で、模擬戦用の内着のベルトを締めながら、エルディネイアが一言。

「何だかこの頃、腰回りがキツくなってきましたわね」

「え？ ルディ太ったの？」

「……もう少し控えめな表現にしてください？」

「あははっ、ネイアはよく動き回るから筋肉が付いたんだよ」

朔耶が直球を投げ、リコーが微妙なフオローをしたりする。なお「ルディ」も「ネイア」も、エルディネイアの愛称である。

そんな調子でわいわいと着替えていると、朔耶はふと、厚手の内着を頭から被ってもぞもぞして

いるおっとり系の支援型魔術士、ルーネルシアに注目した。

彼女の首筋の裏側、頸椎の辺りがぼんやりと光っているのだ。

なんだろう？ と目を凝らしてみれば、何か呪文のような紋様が浮かんでいる。

「これって？」

朔耶が訊ねると、エルディネイアがそれを見つけた。

「あら、今日は調子が良いそうですね、ルー」

「あらー、出てました〜？」

ようやく内着に袖と頭を通したルーネルシアは、髪を引き出しながら首裏を気にする。そして朔耶に、これは子供の頃から度々浮かんでいた一族の紋様であるらしい、と明かした。

『らしい』というのは、詳細がはつきりしていないからだそうだ。ただ、魔力が高まったり身体の調子が良い時に現れやすいという。

この紋様の存在は、友人であるエルディネイアやリコー達も知っていた。しかし、どんな意味があるのかまでは、ルーネルシア自身も知らない。

「お父さまとお母さまはあー、何か知ってるような口ぶりでしたけどねー」

あまり詳しく語られた事は無いそうだ。

ふむふむと興味を引かれた朔耶は、神社の精霊に解析をお願いしてみた。

『どういふものなのか分かる？』



ウム

神社の精霊によると、どうも彼女の血筋に刻まれた呪いのようなものらしい。呪いと言っても、本人に害を成すものではない。

フルイ ケイヤクノ ヨウダ

『契約？』

恐らく、一族である事を示す印のごとき意味があるのだろうとの事。精霊の力が働いた形跡があるそうだ。

子々孫々にわたって魔術の効果を継続させるとなると、精霊との『血の盟約』が使われるのが一般的。彼女の家も由緒正しき古い血筋なので、どこかの代でそういう処置が取られていても不思議ではない。

つまりあの紋様は、彼女が間違いないくその家の血筋の者であると証明する印なのだ。

「——って、あたしの精霊が言ってるよ」

「まあ、そんなところでしょうね」

「まあ、さすがはサクヤ様ですわ」

「それにしても、サクヤちゃんの精霊って便利だね」

エルディネアがおおむね予想していた通りだと頷き、ルーネルシアは素直に感心。リコーは朔耶の持つ精霊の加護を羨ましがった。

そんなこんなで着替えを終えた女性陣は、男性陣メンバーと合流し、今日の模擬戦に向けてミーティングを始めるのだった。

「右！ エルスレイの牽制、サポートにノーマとリコーよろしくですわっ、ルー！」

「風、送りますわ〜」

「良い反応ね、行きますわよドーソン！」

「いつでも」

四つの学び塔のうち、武術の塔で行われるチーム戦。

てきばぎと指示を出したエルディネイアは、従者兼、婿候補であるドーソンを従えていつものように突撃を敢行した。

ルーネルシアが既に発現させていた風の支援魔術でそれを補佐する。

「来たぞ！ 二班に分かれて迎撃用意！」

「つて、ちょっと早すぎないかっ!？」

「展開が間に合わない！ 各自任意に行動せよ」

エルディネイアの突撃戦法を予測していた相手チームは、突っ込んで来たところを挟み撃ちしようとする特殊な陣形を考案していたのだが、想定よりも早く突入されたために陣形が崩れた。

「チャンスですわ！ 相手のリーダーを狙い撃ちに——」

「油断は禁物だよ、まだ統制された動きしてる」

勢いづくエルディネイアをドーソンが制止する。これまで常に彼女の傍らで補佐してきたせいか、ドーソンもすっかり参謀役が板についていた。

彼は、陣形を崩壊させられた相手チームが各自バラバラに動いているように見せかけつつも、後退するリーダーの動きに合わせた立ち回りをしている事を見抜いた。そしてその作戦を逆手に取るための策を巡らせる。

まず、エルディネイアを味方の援護が届くエリアへと誘導し始めた。

「こっちだ」

「え、ええ？ それじゃ向こうのチームと離れてしまいますわよ？」

と文句を言いながらも素直について行くエルディネイア。

最前線から離脱するエルディネイアとドーソンを、相手チームの主力攻撃手が追撃に出るも、なかなか強力な風の支援魔術に阻まれて距離を詰め切れない。

そうこうしている内に、相手チームのリーダーがエルディネイアチームの各選手の立ち位置を見て、ある事に気付いた。

「まずいつ、前衛は一旦戻れ！」

「さ、反撃の舞台は整ったよ」

ドーソンは、割と優雅な仕草で納刀してみせると、エルディネイアに指揮を促した。

エルディネイアが誘導されたのは、副長エルスレイ、攻撃型魔術士リコーと支援型魔術士ノーマが制圧するエリア。

「全軍、突撃ですわ！」

エルディネイアを追って突出していた相手チームの主力攻撃手は、慌てて後退しようとするも、ルーネルシアの支援魔術でまでも阻まれ、味方と合流する前に討ち取られた。

こうして攻撃の要を失った相手チームは、間もなく陥落したのだった。

「お疲れ様でしたー」

「良い試合でしたわ」

試合を終えた朔耶達は、制服に着替えて一般教室に戻ると、一息つきがてら雑談に興じる。先ほどの修学旅行に関する話から、学院内での生活の事など、お喋りのネタは尽きない。

やがて話題は、最近よく聞かれる噂へと移った。酒場などで実しやかに囁かれているという、魔族組織の残党の噂。

「魔族組織かー……」

朔耶は大学院に入る以前、アーサリム地方の奥地に潜む魔族組織の討伐に参加し、組織の長、魔族ヨールテスとの一騎打ちに及んだ時の事を思い出す。

なお、一般的にこの世界の『魔族』とは、邪業とされる異形化や不死の研究を率先して行い、そ

の身の特異な状態に変化——すなわち『魔族化』させた者達の事である。

（ヨールテスって、バリリツカムの温泉宿に『扇ぎ機』とか残した、大昔の発明家ルッテンだったのかもしれないよね）

今もなお、オールドリアに名を残す発明家ルッテン——もとい『体内呪文』という老化を抑制する術によって二百年近くも生き続け、オールドリア大陸の暗部に君臨していたヨールテス。

サムズにて動乱を引き起こし、人狩り達に人を攫わせて魔物に変え、その魔物を使って王都を攻めさせた。

最期は、身体を維持していた体内呪文が消し飛んだ事で精神が退行し、無垢な幼子となって、側近のキルトの腕の中で静かに息絶えた。

その魔族組織の残党は、現在も各国に散らばって潜伏しているとされている。

最近になって彼等の噂が囁かれ始めたのは、何か行動を起こす前兆ではないのか。

エルディネイアとチームメンバーは、その噂について朔耶に質問する。

「サクヤは、何かそういった情報は存じませんか？」

「うーん、特に聞いた事は無いなあ。今度レイスにでも聞いてみるよ」

変な噂が急に世間に流れ出した場合、誰かが裏で動いている可能性がある。以前、自分がフレグンスの第一王女、レティステシアとの不仲説を流されたように。

朔耶はそう言って、噂が流れた背景について考える。

「あれも大変でしたわね、色々な意味で」

「王女様とやり合って旧市街地を一つ瓦礫に変えたんだってねー」

エルディネイア達が、当時の事に言及し始める。

レティレスティアとの不仲説は、朔耶とレティレスティアが取り壊し予定の旧市街地において全力の一騎打ちを演じ、その後、王室から両者の和解が発表された事で終息を見た。噂を流布した首謀者達が、二人の闘いの凄まじさを目の当たりにして恐れを為し、分裂したのも大きな要因である。その旧市街地だが、現在は瓦礫の撤去も終わり、当初の予定通り機械車競技場建設のための整地作業が進められている。実は手っ取り早く古い建物を解体するために、朔耶達のお芝居の舞台として選ばれた事は一部の者以外には内緒である。

「原因は痴話喧嘩って発表だったけど、誰と誰の痴話喧嘩でそうなったんだろう？」

「まあ、その話は色々ややこしいから察して……」

リコーとノーマが興味津々な様子を見せるも、朔耶はあまり突っ込んでくれるなど流したのだった。

その後、城に向いた朔耶は、宮廷魔術士長レイスに魔族組織の残党について訊ねてみた。

「学院でもその噂を知ってる人が結構いるみたい」

「確かに、各地でそういう噂が囁かれているようですね」

レイスはそういう噂が広まり始める以前から、魔族組織の残党について調査をしていたらしい。

百年以上の歴史と、大国にも匹敵する規模を持つ組織だったので、末端構成員が各地に残っているも不思議は無い。

しかし、今のところは彼等が集結して活動するような兆候は見られないとの事だった。

「一応、警戒はしていますが、これまでのところ特に目立った動きはありません」

「それって、もしかして組織の残党って人達に目星が付いてるって事？」

「いいえ、さすがにそこまでは。それと知らずに魔族組織と取り引きしていた商人の動向を探って、大量の食料や資材の急な出荷が無いかなどを調べるんですよ。後は裏取りですね」

「ああ、なるほど」

魔族組織の残党を見つけ出して直接監視する事は難しいが、彼等と交流のありそうな者達の動向を監視する事で、間接的に彼等の動きを推測しようとしているらしい。

「最近の噂について、何かサクヤの勘に引っかかる事でも？」

「ううん、別にそういう感じはしないけど」

「それなら問題無い、という事でしょう」

朔耶の勘もすっかり当てにしているレイスに、肩を竦めてみたりする朔耶なのであった。

城に寄ったついでに、レティレスティアのところにも顔を出していく。公務も一区切り付き、

ちようど休憩に入ったところだったので、二人でお茶を頂きながら雑談に興じる。

話題はやはり、修学旅行について。

「私も、ティルファには何度か招かれた事がありますが——」

訪れる度にどこかしら形が変わっている刺激的な街なので、学院生達にとっても楽しい旅になるでしょうね、と思いい出しては微笑むレイレスティア。

「レティはこんな風に、皆で旅行とか行きたいと思つた事ないの？」

「うーん、どうでしょう？ あまり考えた事はありませんでしたけど……」

やはり育ってきた環境が違うせいか、いまいちピンと来ないらしい。

しかし、以前自分が地球世界にある朔耶の実家に遊びに行った時の事を思うと、今回の修学旅行も学院生達にとつてきつと素晴らしい経験になるであろう事は分かるという。

「そっかあ、実感が伴わなきや、そもそも面白いかどうかも分からないよね」

朔耶は、いつかレティレスティアにも「旅行先で友人と過ごす楽しさ」というものを教えてあげたいなと思うのだった。

夕暮れに染まるオルドリアの大地。街にランプの明かりが灯り始める頃。

朔耶達の修学旅行先になっているティルファでは、遠方から運搬された貴重な荷物が中央研究塔に運び込まれていた。

中島の船着き場で陣頭指揮を執っている衛士に、ティルファの最高指導者である中央研究塔所長ブラハミルトが声をかける。

「ご苦労。アーサリムからの積み荷はこれで全てか？」

「ハッ、ほとんどが小物ですので、これで全部です」

つい最近まで未開地と称されていた、南東の部族国家アーサリム。現在はオルドリアに君臨する四大国の一つである。

といっても、元々は現地に住む多数の部族の集まりで、先の魔族組織討伐においてフレグンス王国やグラントウルモス帝国、ティルファの三国と協力関係を結ぶために、急遽纏まって建国を宣言した国である。それだけに、国家と言ってもまだまだ部族集団の域を出ない。

税制度などを含め、国家を運営するにあたっての法すら十分に整備されておらず、商人達は今はチャンスと、売り込みや掘り出し物の発掘に勤しんでいる。法が定まれば、そういった事にも税を課される可能性が高い。

中でもアーサリム地方の奥地にあつた魔族組織の施設跡には、貴重な古代の書物が何冊も所蔵されており、主にティルファが研究目的で収集を進めていた。

これも、アーサリムが普通の国であつたなら、国宝級の財産として扱われ、そう簡単に持ち出せたりはしなかつたであろう。

ブラハミルトは今回収集された書物の中でも、特に貴重な物を収めた小箱を手取る。

「これは地下の書庫に収める。残りはいつもの資料室に運んでおくように」「了解しました！」

敬礼で見送られながら船着き場を後にしたブラハミルトは、小箱を持って地下にある特別な書庫、代々中央研究所長しか入る事が許されない『禁断の書庫』へ赴いた。

途中、廊下で秘書官より声をかけられる。

「所長、間もなく会議の準備が整います」

「分かった。すぐに行く」

ブラハミルトは簡潔にそれだけ告げ、ひとまず禁断の書庫へと下りて行く。

魔法の鍵で厳重に施錠された重厚な扉は、見た目とは裏腹に片手で簡単に押し開けられた。鍵を差し込み、解錠する一般的な扉とは違い、研究塔所長の鍵を持つ者の行く手は阻まず、鍵を持たぬ侵入者は一歩も通さないという造りになっている。

扉を潜ると、四角い螺旋階段が地下深くまで続いている。

その最下層にある書庫の入り口にも、魔法の鍵で施錠された扉があった。そこが『禁断の書庫』だ。

鍵を開けて入室したブラハミルトは、小箱から書物を取り出して手早く机に並べた。

「……ん？」

その時彼は、書庫内に奇妙な空気の揺らぎが発生したのを感じ取った。

まるで誰かに見られているような、視線のごとき気配。

古い書物には、時折この世ならざるモノが憑いている場合がある。持ち主の強い思いや、染み付いた人の情念が魑魅魍魎を呼び寄せ、本を手にした者を魅了し、あるいは不幸にする。

「ふむ……後でじっくり調べておくか」

気にはなったものの、今日はこれから大事な会議があるのだ。

フレグンスとの交流の一環で、大学院の生徒達が修学目的で旅行にやって来る。その受け入れ態勢について、各研究塔の責任者や街の代表者達と共に、色々と協議を進めなければならない。

書物と奇妙な気配の調査を後回しにしたブラハミルトは、しっかりと鍵を掛けて禁断の書庫を後にした。

ブラハミルトが退室した後、暗い書庫内にぼんやりとした明かりが灯った。

それは、机に並べられた古代の書物の一冊。

表紙には『魂の進化・後編』という大きな文字と、『生命操作研究』という小タイトルが書かれている。

その本の光に照らし出されるように、書庫の壁際に並ぶ古い本棚から、黒い人影が浮かび上がった。その姿は、煙が渦巻いているかのごとく曖昧で仄暗い。

人影が本に近付く。すると本はひとりで開いて、ページがパラパラとめくられてゆく。

そしてあるページで止まった。

そこには、「魂の移動」に関する研究と考察が記されていた。

黒い人影の視線は、そのページに記載されている『精神体による他者への憑依実験』の項に注される。そこには、人間への憑依は不可能である事や、動物や昆虫になら可能であるという内容が記されていた。

黒い人影は書庫内を見渡すような動きをすると、ふと壁際の天井付近まで浮かび上がり、そこに張られている蜘蛛の巣の一つを包み込むがごとく丸くなった。

そして収縮するように萎んでいき、やがて小さい粒となって消える。

黒い人影が消えた後、蜘蛛の巣から一匹の小さな蜘蛛がポトリと床に落ちる。

蜘蛛は書庫の扉付近まで這って行くと、壁に出来た小さな亀裂に身を隠した。

そうして亀裂の奥からじっと、書庫の扉を見つめていた。

まるで扉が開かれるのを待つかのように。

王都の一般開放区にある、サクヤ邸にて。

「あゝ、やっぱり広いお風呂はいいわあ〜」

ちよつとした温泉並みの広さを誇るお風呂場で、一日の疲れを癒す朔耶と親友兼専属メイドの藍香。湯船に浸かりながら今日の出来事などを話す内に、話題は修学旅行の事になった。

「修学旅行いいなあ、あたしも朔ちゃんと旅行したいわ」

「つつてもこればかりはね〜」

キャンプの時は色々と未確定なまま生徒主体で動いていたので、特例として藍香をアドバイザーの立場で同行させられた。が、修学旅行は初めから学院側が主体として動いている行事なので、部外者は参加させられない。

「キャンプの時みたいに、騎士団候補生あたりとの合同旅行とかになれば、枠は作れるかもしれないけど」

「で、旅行先でまた一騒ぎあるわけね？」

「……否定は出来ないのが問題よね」

トラブル前提で話す藍香にツッコみたい朔耶だったが、実際何かしらトラブルが起きるような気がするので、笑うに笑えない。

「あっ！ そうだ！ 朔ちゃんの専属メイド枠で参加というのは？」

「皆が真似して自分の使用人連れて行ったら、エライ事になるでしょうが」

藍香のボケ発言に今度こそツッコむ朔耶。

そうして、オールドリアの平穏な夜は更けていくのだった。

第二章 潜在する事案

朔耶達が王都で元気に大学院生活を送っていた頃。

カーステアの繁華街の奥から、路地を抜けた先にある旧表通り。古い建物が並ぶその寂れた通りの一角に、半壁の崩れかけた小さな酒場があった。

窓も扉もない吹きさらしの店内には、申し訳程度に並べられたテーブルと背もたれの壊れた椅子。ただ一つ、主人のカウンターだけはやけに立派な作りをしている。ぼつぼつと出入りする客は、お世辞にも堅気とは言いがたい。

そんな荒くれ者が集まる場末の酒場にて、隅のテーブルに身を寄せ合って密談を交わす八人ほどの集団がいた。

「各地の仲間の様子は、どうなっていますかな？」

中でも落ち着いた雰囲気のお紳士が問う。厚手の外套を羽織った旅装束ながらも、身綺麗な風体と丁寧な口調からは、こんなうらぶれた場所には似合わない高貴さが窺える。

「事務の班だった者はみんな一般民に溶け込んで、それぞれの生活を営んでるよ」

「警備班は若いのが冒険者になって、中にはオールドリアから他所大陸に渡った者達もいるよ

うだ」

お紳士と向かい合う商人風の男と、革鎧で武装した傭兵っぽい男がおのそう答えた。

「そうですか。今はサムズ近辺に住みやすくなっているようですから、未だ放浪している者達に情報を回しましょう」

「うーん、どうかなあ……」

「情報を回したところで、連中が腰を落ち着けるとは思えんが」

移動した地域に根付き、新たな暮らしを始める者達がいる一方で、平穏な生活に馴染めず旅を続け、かつてのような生き方を願う者達も少なくないと二人の男は訴える。

「しかし、ヨールテス様亡き今、組織の再建はもはや不可能です」

お紳士はそうキツパリと否定した。

彼等は、とある組織——一年ほど前にフレグンス、グラントゥルモス、ティルファの三大国連合によって壊滅させられた、魔族組織の残党であった。

そしてその残党集団のリーダー的な立場にいるこのお紳士、仲間内では『バスラ』と呼ばれている彼は、魔族組織の長、ヨールテスの側近の一人であった。

彼はその昔、キトという大きな街に君臨していたフランバッハ家なる好事家大貴族の屋敷に仕えていた元執事だった。

屋敷の女主人アリテリスがティルファの魔族狩り組織によって殺害された折、当時フランバッハ

家のお抱え発明家だったルッテンや他の使用人と共に未開地アーサリムへと脱出してきたのだ。

魔族であったルッテンは、のちにヨールテスと改名し、アーサリムで魔族組織を立ち上げると、キトを前線基地として流通を掌握し、経済を以ってオルドリア大陸を支配しようとした。

キトはやがて商人国家と呼ばれるほどの規模になり、アーサリム討伐の少し前に三国連合によって制圧されるまでは、大陸中の物資の流通を一手に担う存在であった。が、その実は魔族組織が造り上げた魔族の国だったという訳である。

バスラもまた、そんな魔族組織のもと、未開地の施設で主の長期間の留守を預かるなどの重要な役割を果たし、ヨールテスからも厚い信頼を得ていた。

そして三国連合の討伐隊にアーサリムの本部施設が急襲された日、バスラは非戦闘員達の脱出避難を指揮していた。

彼は、ヨールテスから前もって「もし自分が討たれたならば、組織は解散せよ」との指示を受けていたのだった。

討伐隊急襲の報を受けた日の本部施設。

『竜籠を全て使って構わん。北の溪谷から海岸線に抜けて行け。先の脱出組と合流しろ』

『それでは、ヨールテス様は……』

普段から支配者としての在り方を意識しながらも、イザという時は自分が最前線に立つて行動す

る。仲間や身内には甘い部分が見られる。そんな風に、バスラから見てヨールテスは、人を超越した存在でありながら実に人らしい一面を持つ主だった。

『儂とキルトはどうとでもなる。いいかバスラ、儂にとつてここは出発点であり、終着点だ。他に帰る場所はない』

ここが陥落する時は自分が討たれた時だと語ったヨールテスは、緊急事態で混乱している施設内を見渡し、ふと表情を緩めて自嘲の笑みを浮かべながら言った。

『少し懐かしいな……彼女の屋敷から逃げ出す時も、結構バタバタしていたものだ』

『……もう、六十年近く経ちますな』

キトを脱出し、一部の使用人と共にこの未開地へやって来たあの日。

『思えば、魔族になつてからというものの、逃げてばかりの人生だった気がするよ』

だからこそオルドリアの経済をほぼ掌握し、帝国の魔族、エイディアス帝という最大の対抗勢力が消えた今、完全なる支配者として君臨すべく動き出そうとしていたものを。

『少し性急に攻めすぎたのかもしれない。以前、お前が懸念していたバンガ達の事も当たっていたな』

『いえ、あれは……』

バンガ——バンガラバンダ・アッサム。アーサリム地方の多種多様な部族を束ねるププ族の長にして、ヨールテスの古い友人。

彼は若い頃に魔族組織創設に一役買い、その一方でヨールテスの助力を得て周辺部族の平定を叶えた。

彼亡き今、かの一族はバンガラバンドの息子、ブレブラバントの代になっていたが、そのブレブラバンドはあろう事か三国連合に与し、魔族組織に牙を剥いたのだった。

あの時、お前の話にもっと耳を傾けておくべきだった、などと珍しく弱気な言葉を口にするヨールテス。

そんな主を心配したバスラが、何か声をかけようとした時、敵部隊が居住施設に侵入したとの一報が入った。

『来たか。行けバスラ、脱出組の事はお前に任せる』

『……かしこまりました。お気をつけて、ヨールテス様』

二人は最後の言葉を交わし、そのまま別れる。

その後、施設は制圧され、ヨールテスが戦女神に討たれたとの報を受けたバスラは、共に脱出した魔族組織構成員に、先ほどの主の指示——『自分が討たれたならば、組織は解散せよ』との言葉を伝えて、組織の解散を宣言した。

それから一年半——組織の残党の一部は今もこうして集まっては、会合を開いている。その人数も、徐々に減ってはいるが。

今ここにいる者達は組織結成時からいた古株達で、ヨールテスに体内呪文を刻まれた、いわゆる『魔族』と呼ばれる存在である。

中でも最年長となるバスラは、見た目こそ六十代後半だが、実年齢は百二十八歳になる。

その他のメンバーの中には、かつてヨールテスがキトで成り上がるために、最初の足掛かりにしたという元チンピラ集団のボスもいた。現在は行商人を装い、三人ほどの残党仲間と各地を巡っている。

仲間内では『おやつさん』とか、『親分』とか呼ばれる気の良いおっちゃん風の男で、古参組の中では『モス』の呼び名で知られる。

「俺達はこのまま三大国や戦女神に雪辱も果たせず、消え往くのみなのか……」

「我等を裏切った恩知らずのブブ族共にも、せめて一太刀、制裁を加えたいところだな」

「彼等の事は致し方ありません。バンガ殿は息子のブラバント殿に、我々の事を話していなかったようですからな」

ブブ族の離反には少々止むを得ない部分もある。バスラにはその心当たりがあった。

比較的穩健である創設期の古参組に比べ、全盛期の頃に集められたメンバーは選民意識が強く、好戦的な者も多かった。

また古参組は、かつて共闘した事もあるブブ族に対し同胞意識を持っていたが、全盛期組は彼等を未開の蛮族として見下す傾向があった。

バスラはその事について、一度ヨールテスに「いつか問題になるのでは」との懸念を伝えた事があったのだが、「大きな問題になっていないのなら、あまり気にする事は無い」と一蹴された。

実際、ブブ族の者達は組織の正式な構成員という訳ではなく、現地の雇われ者的な位置付けにあった。そのため、彼らを軽視する組織内の風潮も、ごく当然の事と捉えられていたのだ。

故に、長であるバンガラバンダは組織に対して不信を覚えるようになり、晩年に至る頃には自分の一族にも魔族組織について多くを語らなくなった。

結果としてブブ族を中心とするアーサリム部族に、魔族組織との関係を正しく知る者がいなくなり、後継者であるブレブラバント率いる部族連合の離反を招いた——バスラはそう分析していた。

「ふーむ……魔族になるのが、義理と人情を忘れちゃいかんって事かねえ」

「まあ、組織の結成時によく働いてくれた彼等を軽視する風潮を放置したのは、確かに問題だったかもな」

そんな、いつもの詮無き愚痴交じりの話をしながら親睦を深める残党達。やがて話題は、最近得た敵方の情報へと移る。

「フレグンスの大学院に在籍している戦女神は、近々他の生徒達とティルファに修学目的の旅行をするらしい」

「そのティルファには最近、アーサリムの施設跡から貴重な書物が運び込まれたと聞く」

「ヨールテス様の私室に置いてあった、古代の書物ですか？」

「恐らくな。そこでモノは相談なんだが——我々であの書物を奪還してみないか？」
傭兵風の男がそう提案する。

彼は、旧魔族組織では諜報を担当していた男で、現在も当時の部下二人と共に情報収集を中心に活動している。古参組の中では『ジグラス』と呼ばれている。

彼曰く、三大国や戦女神への雪辱を果たすのは無理でも、ヨールテスの遺産でもある貴重な古代の書物を取り戻すくらいは出来るかもしれない。

「あれらの書物には、組織で培われた技術の粋が詰まっている。今後も我々の利益となってくれるはずだ」

「ふむ……奪還の理由は単なる感傷ではない、というわけですか」

「我々もそろそろ定住できない者達が集まって、適当に組織を立ち上げてもいい頃だと思う」
ヨールテスがせっかくな残してくれた、体内呪文による不老。

このまま当て所もなく大陸を彷徨い、流浪の民として朽ちてゆくよりは、魔族組織の流れを汲む者として何かしらの実績を残したい——ジグラスは、行動を起こす理由をそう説明した。

「……まあ、くだらん盗賊堕ちになるくらいなら、そうする方が妥当か」

流浪しているだけならまだいいが、時間と力を持って余して暴れる者も出てくるだろう。

敗残兵が集まったの傷の舐め合いのようで柄でもないが、などと自嘲しながらも、新しい組織の立ち上げに同意する仲間達。

「それでは、書物の奪還を以って我々の新組織結成を志す、という事でよろしいですか？」

「ああ、それで良いと思う」

「俺も賛成だ」

バスラの問いかけに、他の面々も頷く。

「分かりました、ではそのように致しましょう。ただ……一つ気になる事がございます」

バスラは新組織結成の前にと、ある懸念を提示する。

「現在、我々とは別に集まって行動している放浪組の事です」

「ああ……」

「そっちの問題があったか」

最初の話題にも出ていた放浪組。

彼等がこの会合に顔を出さないのは、バスラ達と主義主張を違えているという事もあるが、実はその深層心理的な部分に一番の要因があった。

創設期からの古参組は、アーサリムに逃れるヨールテスを頼みに集まってきた、いわゆる寄せ集め感溢れる人材達である。

それに対して全盛期組は、組織からスカウトされた実力者達。そのためエリート風を吹かせて、古参組を格下と見ているところがあるのだ。

古参組が彼等に相談も無く新組織を立ち上げれば、何かしら反発してくる可能性もある。しかし、

相談しようにも普段から会合の呼びかけに応じないので、このような込み入った話などする機会もないのが現状だ。

「一応、向こうにも連絡は出しておきましょう」

新組織設立に参加するかどうかは、彼等自身で判断して決めれば良い。

結局、懸念はあれど有効な対策無しとの事でこの話は締めくくられる。

次に話題は、書物の奪還にあたっての具体的な作戦に移った。

「書物の保管場所には、おおむね見当がついているようですな」

「ああ、あれほどの貴重な書物だからな。恐らく研究塔の地下書庫に運び込まれるはずだ」

最初に書物の奪還を提案したジグラスがそう答えた。

ティルファの研究塔内部については、割と詳しい情報を持っている。何せ組織の構成員が、現中央研究塔所長ブラハミルトの側近として付いていたのだ。

もっとも前線基地としていたキトが制圧され、地下の指令室が発見された際に、そうやって潜んでいた構成員達の情報はあらかた暴かれてしまったが。

なおそのキトは、商人が集う街として変わらず需要が高いため、現在も三大国による共同統治のもと、ほぼ普通に機能している。

「地下の書庫周辺は大きく作り変える事が出来ないはずだから、当時の情報を参考に計画を立てられる」

フレグンスの大学院が主催する学生旅行は、良い目くらましになる。そちらに警備の目が向いている際に中央研究塔に侵入し、地下深くにある特別な書庫から古代の書物を奪還する。

「その作戦で行こう」

「分かりました。では役割分担も決めて準備に取り掛かりましょう」

そうして彼等は旅支度を整えると、日没と共にティルファへ向けて出発した。

出がけに、今回の計画の発案者であるジグラスが、今後のルートを示す。

現在地はカースティアの街。ティルファまで最短距離を行くなら、街道を北に進んでフレグンスに入り、国境の街カンタクルと王都を経由して行くところだが、今回は別ルートを選ぶ。

「少々遠回りになるが、サムズ方面からキトの隣街を経由して進む」

あの辺りは最近、サムズの再開発事業や帝国の機械車競技場の建設事業などの関係で、出稼ぎ労働者と行商が頻繁に行き来している。それに紛れば安全に移動できるはずだ。

「なるほど。それでは行きますか」

魔族組織の残党集団は、街から十分離れて人目の無くなった辺りで移動用の特殊な術の準備態勢に入る。

「なるほど。それでは行きますか」

魔族組織の残党集団は、街から十分離れて人目の無くなった辺りで移動用の特殊な術の準備態勢に入る。

やがて、辺りに太鼓を叩くような音が響き渡った。

やがて、辺りに太鼓を叩くような音が響き渡った。

カースティアの西にある風の街道で『ノミのように跳ねる怪しい人影を見た』という奇妙な噂が

カースティアの西にある風の街道で『ノミのように跳ねる怪しい人影を見た』という奇妙な噂が

カースティアの西にある風の街道で『ノミのように跳ねる怪しい人影を見た』という奇妙な噂が

カースティアの西にある風の街道で『ノミのように跳ねる怪しい人影を見た』という奇妙な噂が

カースティアの西にある風の街道で『ノミのように跳ねる怪しい人影を見た』という奇妙な噂が

カースティアの西にある風の街道で『ノミのように跳ねる怪しい人影を見た』という奇妙な噂が

カースティアの西にある風の街道で『ノミのように跳ねる怪しい人影を見た』という奇妙な噂が

カースティアの西にある風の街道で『ノミのように跳ねる怪しい人影を見た』という奇妙な噂が

囁かれる今日この頃。

フレグンス城を訪れていた朔耶は、上層階のサロンで、修学旅行の日程についてレイス達と話し合っていた。

手元には学院とティルファの協議・調整を経た、生徒達からのイベント要望リスト。

「じゃあ日程はこれでほぼ決まりかな。こつちも結構早く決まったね」

「ええ。元々フレグンスとティルファは親交も深いですからね」

ティルファにはフレグンスの要人が公的に訪問する事も少なくなかったため、今回の集団旅行の受け入れにもある程度の耐性があったらしい。

加えてティルファが近年、大学院のような人材育成施設の設立に意欲的であった事も、今回のス

ムーズな進行に関係しているという。

朔耶は「なるほどねー」と頷きつつお茶を一口。空になったカップに、宮廷魔術士長補佐官フレ

イがお茶を注ぎながら話題を繋ぐ。

「人材育成施設と言えば、帝国でも総合的な人材育成機関の設立が検討されていると聞きました」

乱立気味な各種道場を一つに纏めて、帝都城の一角に帝都大学院を設けるという計画。

知の都ティルファに集まる研究者達が、溢れる探究心のままに己の研究に没頭し、ついには発明

品だらけのカオスな街並みを作り上げたのと同様、武の国グラントウルモス帝国に集う猛者達もま

た、己を高める事にしか興味が無い個人主義者達である。

た、己を高める事にしか興味が無い個人主義者達である。

た、己を高める事にしか興味が無い個人主義者達である。

よって腕に覚えのある者達は、他の道場に教えを請う事を善しとせず、『我が流派こそ最強なり』とばかりに、次々と自分の道場を作ってしまうのだ。

ティルファも帝国も、そんな風に皆が皆、己が道を邁進する者達ばかりなので、一律的な教育機関を設立するノウハウが育っていない。

そこで帝国はフレグンス王室に、歴史ある王都大学院の運営知識が欲しいとの打診をしてきたらしい。

以前、フレグンスが帝国から機械車競技場建設のアドバイザーを迎えた時と同じように、フレグンスから学院運営に詳しい者を帝国に送ろうかと上層部にて話し合われているとか。

「ティルファと帝国にも大学院みたいな学校が出来たら、そのうち三国間で学生の交流イベントとかやれるようになるかも」

三国対抗の模擬戦はまず間違いないであろう。それぞれの国の特色を売りにした催し物を披露する文化交流的なイベントも期待できる。

「サクヤがいれば、いずれそうなりそうですね」

朔耶の発想に、レイスも同意する。

「それにしても、帝国の学園計画かあ……ちよつとどんな具合か様子を見て来ようかな」

崖の上そばびえる二重防壁に囲まれた、堅牢な佇まい。城下街をそのまま下層階に組み込んだ巨大な帝都城内に学校施設を入れるとなれば、結構大きな工事が必要になるかもしれない。

興味を覚えた朔耶は、明日あたり帝国に行ってみようかと考えて、ふと思いつく。

(そう言えば、前にアルサレナさんに指摘された『皇帝の黒后』の二つ名もそのままだったっけ)

朔耶は、帝国では『皇帝の黒后』の二つ名で官民間問わずよく知られている。

が、フレグンスの王室特別査察官という役職に就いていながら、帝国でそんな風に特別な待遇を受けている事を、一度フレグンス王妃アルサレナに問題視された事があるのだ。

その待遇は、グラントウルモス皇帝バルティアの個人的な恋慕によるところが大きいのだが、朔耶としてその呼び方を完全否定していない以上、責任がないとは言えない。

当時はレティレスティアの都築家訪問や、その後の『戦女神と精霊姫の不仲騒動』などでバタバタしていて、すっかり忘れていた。

思い出しついでに、バルティアと話し合つて来ようと、心のメモ帳に記しておいた。

翌日。

朝から地球世界の実家に戻った朔耶は、そこから直接帝都城に転移した。遠く離れた距離を数秒で移動する裏技発動である。

帝国に転移した場合、大抵帝都城地下の祭壇跡に出る。

こちらの城にも割と通い慣れた感のある朔耶は、さつそく上層階にある皇帝の執務室を目指して地下空間を後にした。

「やほー、バル、ヴィヴィアンさん」

執務室の扉を開いた朔耶は、奥の執務机で山積みの書類と格闘している皇帝バルティアと、その補佐官であるアネットにひらひらっと手を振りながら挨拶をする。

「おおっ、サクヤではないか」

「いらつしやくいサクヤちゃん。で、陛下は手を止めないでくださいね」

立ち上がりかけたバルティアの肩をそっと押さえて執務を補佐する、有能な皇帝付き補佐官、ヴィヴィアンことアネット。

ちなみに「ヴィヴィアン」の呼び名は、かつて密偵としてフレグンスの王都に潜入していたアネットが名乗っていた偽名である。今では朔耶からの呼び名として、すっかり定着している。

アネットは突然の訪問にも驚く事なく、呼んでおいた使用人にお茶を用意させた。朔耶が帝都城の地下に現れると、そこを専門に監視している者から報告が上がる仕組みになっているのだ。

元々この『サクヤの来訪監視員』は皇帝バルティアの指示によって設けられた役職で、以前はバルティアに直接報告が上げられていたのだが、今はアネットがそういった皇帝周りの情報伝達網を取り仕切っている。

「それで、今日はどうしたの？」

「うん、ちよつと小耳に挟んだというか、帝国にも大学院を作るって話を聞いたから、個人的に様子を見に来たの」

「ああ、あの計画は——」

アネットの問いに朔耶が答えると、バルティアが手を止めて説明しようとする。しかし、側近スマイルのアネットがそれを阻止した。

「陛下は仕事してくださいね」

そして、あからさまに不満そうな皇帝陛下に飴あめをチラつかせて、やる気を出させる。

「あと十枚仕上げたら休憩にしましょう」

「ぬおおおお」

書類の処理速度が二〇%ほど上がったようだ。

そんな皇帝と側近に、『なかなかいいコンビだなあ』と和なごみつつ、必死に笑いを堪こえる朔耶であった。

その後、休憩に入った皇帝と共にお茶など頂きつつ、朔耶は帝国の大学院設立計画について詳しく話を聞いてみた。

が、まだ企画段階で具体的な構想は固まっていなとの事。

「やはりフレグンスの大学院に倣なまうのが妥当たとうかと思っただけ」

「なるほどね。フレグンスの方でも運営に詳しい人材を送る準備はしてるみたいだよ」

ティルファでも同じような計画が持ち上がっているらしいので、いずれ三国間の学生が交流でき